

高等学校「国語表現」の教材開発

M11EP014

矢崎 克洋

1. 研究の目的

高等学校の国語科の中で「国語表現」（現行は国語表現Ⅰ、Ⅱ）は、教材の領域が非常に多岐にわたっている科目である。そのため、生徒の実態を考慮して教材内容を決められるのは利点であるが、その反面、自由度の高さゆえに教材の選択が恣意的になってしまうおそれや、教材自体の妥当性や価値を十分に検討できないまま授業を行う現実があり、課題だと感じてきた。

教科書の内容も出版社によってバラツキがあり、現代文や古典ほど教える内容に普遍性がない。私が経験してきた中での普遍的な内容は、漢字や語句の知識、主語述語などのねじれ解消や係り受けなどの文構造の整理、そして小論文の書き方や練習等である。これらの内容を否定するわけではないが、生徒にどれだけの効果を与えているのか、自分自身納得ができていないまま今に至った。

以上の点を解決したいという思いと、今回の学習指導要領の改訂に伴って記載内容に変更があったことを契機として新学習指導要領の「国語表現」に対応するための先行的研究を兼ねて、新学習指導要領で新たに加えられた内容に加えて従来の内容を再検討し、魅力ある教材の開発を目指した。

2. 教材を考える方向性

具体的な教材を考えるにあたっては、新学習指導要領に対応するための先行事例研究という観点から、新学習指導要領を現行の学習指導要領と比較し、その相違点を中心に据えようと考えた。その比較から見えてきたことは、以下の3点である。

- | |
|--------------------------------|
| a 「想像力を伸ばすこと」についての記述の追加 |
| b 「国語の向上を図る態度を育てること」についての記述の追加 |
| c 言語活動の一層の重視 |

a は、「国語表現」の目標だけでなく、高等学校国語科の教科の目標でも同様の変更がある。ここで述べている「想像力」とは『学習指導要領解説』によれば、「物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力」であり、「高等学校段階における想像力には、物事の微妙なところまで感じ取る心情的な側面のみならず、根拠に基づき先を見通すなど、論理的な側面もあること、そして、そのような想像力を一層発展させる必要があること」とある。b は、教科の目標にも掲げられている内容で、今回の改訂で新たに付け加えられた。c は、現行では「内容の取扱い」の中に示されていた「言語活動例」が「内容」の中に位置づけられ、再構成された。この措置は「国語表現」だけではなく他の科目も同様であるが、指導事項内容を「言語活動例」を通して指導することについて一層明確にし、言語活動の充実を目指す意図がある。具体的な活動例を示した部分の扱いが格上げされたと考えられ、現場での積極的な取り組みが強く求められていることがうかがえる。

これらのうち、a は文言としては新たに加えられたものではあっても小中学校では既存の目標であり、高校でも「想像力を伸ばすこと」の意識がなかったわけではない。また、b は、内容があまりに大きく、抽象的すぎて教材化の視点としては難しい面がある。以上の点から、c の言語活動の充実という視点で

教材を考えることにした。現実的に教材をイメージしやすく、生徒も効果を実感しやすいことが利点である。

3. 教材「高校を紹介するパンフレット作り」

(1) 設定の理由

生徒たちは、以前にマッピングメモを利用して発想を広げ、主題をつくる活動を行っている。今回はそれをさらに発展させる意味で、マッピングメモの手法を利用してアイデアを整理し、パンフレットという形式で表現する。

書くという行為の目的の多くは、その内容を知らない人に伝えることである。しかし学校の授業では、自分たちよりも知識の豊富な読み手（教師）に対して、知識が不十分な書き手（生徒）が書くという構造が多くなりがちで、それが書くことの動機づけの低さにもつながっている。そこで今回は、教師以外の読み手を前提にし、自分たちで取材をしたうえで書く活動を設定した。どうしたら読み手にわかりやすくなるかという意識を常に持つことは、文章を書く上で非常に重要なポイントである。また、パンフレットは多様な表現スタイルが可能な表現媒体であり、生徒の工夫の余地が大きい点も利点となる。さらに、「書くことがないから書けない」という生徒も、テーマについて取材することによって「書くこと（内容）」を獲得できる。書くことは伝えることだということを生徒たちに体験してもらい、文章を書くことの抵抗感を減らすようにしたい。

(2) 目標

- ・マッピングメモの手法を利用してアイデアを整理する。
- ・どういう情報が読み手にとっては必要なのかを想像する。
- ・どういう書き方をすれば読み手の理解が深まるかを意識して、文章を書く。

なお、この活動を通して扱う学習指導要領の指導事項は以下のとおりである。

- ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。
- ウ 主張や感動などが効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫して書くこと。
- エ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。
- オ 様々な表現についてその効果を吟味したり、書いた文章を互いに読みあって批評したりして、自分の表現や推敲に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

4. 実施状況

1 時間目「アイデアを整理する」

- 情報に関する認識を深める。
(人によって価値ある情報は異なる。どういう内容が価値ある情報となるか。)
- パンフレットの内容についてマッピングメモを班で作成し、書いた内容を相互に見合う。
- パンフレット作成のグループを作る。
- テーマを決め、取材について検討する。
- 評価の観点を知る。
- 「活動の記録」を書く。(テーマ、取材担当)

2 時間目「パンフレットの要件」

- パンフレット作成の要点を知る。
- レイアウトやタイトル等の仮決めをする。

3 時間目「リード文について学ぶ」

- パンフレットのリード文について学び、作成中の内容でリード文を各自で書く。
- パンフレットの作成を行う。

4 時間目「作品を評価する」

- 校正について学んだあと、生徒が書いたものを材料にしてパンフレットの説明文の校正練習をする。
- パンフレットの評価をする。
(「相互評価票」に従って評価点をつけ、評価

コメントを書く)。

○書いた「相互評価票」を提出。

<4時間目は、ここで終了。生徒の書いた相互評価票のコメントを教師が一覧表にまとめ、5時間目に配布。>

5時間目 (20分程度)「活動を振り返る」

○相互評価票のコメントを読んで「活動自己評価票」の記入を行い、振り返りをする。

※4時間で計画したが、今回の実践では5時間弱かかった。タイトルについて学ぶことも加え、5時間計画とした方が良い。

5. 教材の価値分析

生徒の学習感想からこの教材の分析を行った。

○この活動を通して、気づいたこと(または学んだこと)は何ですか。

- ・相手が求めている情報が何なのかを探するのは、とても大変だと感じた。
- ・自分はわかっていることなのに、それを知らない人に伝えるのが、とても難しいと思った。(類似 他に2例)
- ・文をずらずら書きつづるだけでなく、写真とかイラストをほどよく取り入れる方が読む気になるということ。

○この活動で、価値があると思ったことは何ですか。

- ・インタビューとか自分達で行動すること。
- ・リード文から、いかに読もうという気持ちを引き出せるかということ。
- ・自分は完ぺき(マ)だと思っても、他人から見るといろいろな改善点を見つけてくれること。
- ・自分たちが作ったものに対して、いろんな人の感想をもらってどう作ればもっと良かったかを考えること。
- ・みんなでできたことそうして協力できたこと。あとは何より達成感!

○この活動を授業で行うことについての意見または感想を書いてください。

- ・この経験が、自分の伝える能力を引き出す

と思った。

- ・現代文(の授業)だけでは学ぶことのできない日常生活に使えることを学べるので良いと思います。
- ・自分の発想を生かしたレイアウトやタイトル説明文を考えられるので楽しい授業だった。次にやるとしたら、パソコンを使ってもっときれいに仕上げようと思った。
- ・協力して何かを作るという授業はあまりないので、よかったと思う。(抜粋)

まず、読み手を意識して文を書くという経験があまりなかった生徒が、この活動では強く読み手を意識したことがわかる。ただし、計画では、情報の価値の相対性にも気付かせることを狙っていた。人によって価値ある情報は異なることや想定した読み手にはどんな内容が価値ある情報なのかを考えさせたかったのである。だが、生徒からはこの点に関する記述は出てこなかった。代わりに、伝えることの難しさや読み手に興味関心を持ってもらうことの重要性については、気づきがあった。

次にこの教材の価値であるが、インタビューをすることについては記述があった。書くことがないから書けないという生徒をなくすために取材活動を勧めたことがインタビューの有効性を知ることにつながったと考えられる。この点は意図したことが達成できたわけだが、マッピングメモを利用したアイデア整理や、読み手を想定することで書くことの抵抗感を減少させられることについては、生徒のとらえ方は大きく異なることが分かった。活動の活性化を図る意味で、深い意図もなくグループ活動とか作成後の相互評価活動などを入れていたのだが、生徒は他者(他の生徒)が自分達の作ったものを見るということ強く意識したようである。他者の指摘により課題が見えてきたり、改善の意欲が高まったりすることに多くの生徒が価値を見出していた。

但し、授業者の意識が不十分だと、国語の授業ではなくなってしまうのは注意点である。

きれいなパンフレットを作ることが最終目的ではない。あくまで国語の学習活動であることをまず授業者が意識し、そして生徒にも意識させることが求められる。

今まで文章を生徒に書かせるにあたり、何を書くかということは意識させても、誰に向けて書くかということはあまり考えさせてこなかった。今回は読み手を具体的に想定することで読み手に対する意識が生まれ、書く内容が明確になったといえる。今回書いた文章は短い、読み手を意識して書くことがどうということかを理解できれば、長い文章を書く際にもこのことは生きてくる筈である。

最後に、全体を通して「楽しかった」という記述が多かったことに注目したい。生徒が喜んで取り組めたことは、学習の効果という面で有意義である。また、最初は生徒たちが面倒くさがっていたのが活動を進めていく中で変容し、最後はとても好感を持って終了できたことは興味深い。教師が思っている以上に、生徒は他者と関わる活動に価値と有効性を感じている。このことは、授業の改善を考える上で重要な視点となろう。以上の点から、この教材は価値あるものと考えられる。

6. まとめ

PISA の学力調査結果は、わが国でも大きな話題になった。OECD の DeSeCo プロジェクトは、その PISA 調査の根拠となっているもので、そこでは「人生の成功と正常に機能する社会の実現を高いレベルで達成する個人の特性」を「キー・コンピテンシー」とし、その概念を3つのカテゴリーに具体化した。

- | |
|-----------------------------|
| ①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力 |
| ②多様な社会グループにおける人間関係形成能力 |
| ③自律的に行動する能力 |

今回行った一連の活動は、このカテゴリー

の①、②に関わっている。キー・コンピテンシーの概念は、現在の学校現場で十分理解されているとは言い難いが、世界標準の学力というものについての関心が高まるにつれ、今後大きくクローズアップされると考える。

21 世紀は知識基盤社会の到来と言われている。資源を加工してものを生産し、それによって利益を生み出してきた従来の社会構造が、知識を創造し活用することで利益を生み出すように変わってきた。そういう中では、求められる学力（能力）も以前とは異なったものに変化して当然である。これからの学校教育の内容的課題は、キー・コンピテンシーの概念をどのような教材や授業で具体化していくかということであろう。「国語表現」にはそれを具体化できる可能性があるし、その意味で重視されるべき科目である。卒業後すぐに社会へ出ていく生徒にとっては、高校がそういう力をつけさせる最後の場となる。このことを踏まえて授業にあたるべきであるが、現状はそれに十分応えてはいない面がある。この状況を「国語表現」という科目によって打開していきたい。この科目は、「書くこと」と「読むこと」の領域に偏りがちであった国語科の全体像を変えることにもつながるだろう。

来年度の実践では、扱う領域をさらに拡大して新たな教材を検討、実践し、「国語表現」がもたらす効果の可能性を探ってみたい。

参考文献

- ・ドミニク S ライエン、ローラ H サルガニコ【編著】立田慶裕【監訳】(2006)『キーコンピテンシー 国際標準の学力を目指して』明石書店
- ・大浦理恵子 安永悟 (2007)「読み手を特定することが文章産出におよぼす効果」『久留米大学心理学研究紀要』第6
- ・鈴木宏昭 他 (1989)『教科理解の認知心理学』新曜社